

オルタナティブな実践としての地域社会プロジェクト —教養科目「地域社会フィールドワーク演習」への歲月—

別府大学短期大学部 初等教育科

教授 吉村 壮明

1 はじめに

全学部学科開講の教養科目「地域社会フィールドワーク演習」を担当して3年が経過しようとしている。文学部や国際経営学部、食物栄養科学部、短期大学部の100名に近い学生が1年生を中心に（単位の関係上、2、3、4年生も）履修する前期のみの演習科目である（2020年より通年開講）。

そもそも筆者が地域社会という分野に携わることになったのは、前勤務地である亜熱帯の島、沖縄キリスト教短期大学で総合教育研究というゼミに相当する科目を担当した事に端を発するが、最初の地域振興プロジェクトとの出会いは2003年から実施された Wanakio⁽¹⁾ というプロジェクトに琉球大学の吉田悦治氏から誘われ、ゼミの学生共々、アジアのどこかの国を思わせるような広大な那覇市農業連合市場を会場としたワークショップの企画担当として参加した事だ。そのプロジェクトで、沖縄、いや全国的にも最も早い時期にオルタナティブな実践を行われていた宮城潤氏が主宰されていた NPO 法人「前島アートセンター」を通し、アートを通じた地域へのアプローチに携わらせていただいた。もう17年も前のことになる。やはり何か価値を産出するのは、熱意ある人々との出会いなのだと思ってしまうが、当時は今日ほど大学と地域の連携が要望されていたわけでもなく、まさに衰退しつつある地域とアートの危機感がこういった動向を産んだのだと言える。ところで、本学の「地域社会研究センター」設立（本稿の掲載誌『地域社会研究』の第1号が1999年に出版）や、さらなる地域貢献の

深化を目指した2014年の「地域連携推進センター」の発足といった流れを考えると、別府大学は数々の NPO 法人にも先駆けて、地域へのアプローチに関しては相当に早い時期から大学という高等教育機関として調査研究を連綿と継続されてきたことになる。この事実は学内外において今以上に高く評価されている。

さて、当時、私の根本にあったのは地域研究で想像されがちな社会学的な知見ではなく、芸術学におけるウンベルト・エーコの「開かれた作品」という概念であった。これは作品が既存の美術作品のように物質や空間的に閉じられたものではなく、参加者や鑑賞者の能動的な「読み」によって作品解釈が開かれていく傾向の作品を芸術学的に論じている名著なのだが、次第に「開かれ」を前提とする芸術作品が多くなっていく状況を考察したものである。今日の建築物と見紛うインスタレーションや、街自体を作品の場としたパブリックアートなどはその最たるものだろう。ただし芸術学的には、である。すなわち篠原資明氏や熊倉敬聡氏が指摘しているように「芸術学的」には開かれていても、「社会的」には開かれていない事が、「開かれた作品」の地平の限界であって、昨



Wanakio2005の広報媒体, NPO 法人前島アートセンター（ウチマヤスヒコ氏デザイン）、2005
<https://whoswho.jagda.or.jp/jp/portolio/1953.html>

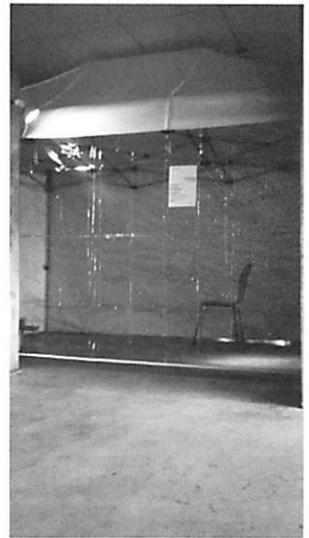
今、もはやアートは「芸術の死」(ダントー)を謳いつつも、そのフィールドは地域や資本システム、ジェンダー、民族、国家までに広がっているのである。無論、受容美学やテキスト論とも結びつく「開かれた作品」という概念のインパクトは1962年出版という時代からも高く評価できるが、目の前にある地域社会の状況を鑑み、筆者は社会的に開かれた作品としての試みとして、地域でのアートプロジェクトやアートワークショップに携わるようになったのだ。そう考えれば実践性の強いカルチュラルスタディーズの一形態と言えなくもないだろう。その後、毎年、所属大学のゼミで地域振興のプロジェクトを行うようになった。その多くは自分の研究費や学内外の研究助成の支援による。

振り返って筆者と学生とのプロジェクト歴を列挙してみると、例えば、地域のイメージを不特定多数の人々に実施した「地域の色」のアンケートを三色の布として西原町に飾った「ココノイロ」(2009)、地域住人から不要になったハンカチや布を回収し、ブータンのタルチョ(祈禱旗)のように記憶を媒介した旗として飾った「フラッグ・プロジェクト」(2008)、独特な建築を迷宮に見立てて探検遊びを行った「学校迷宮探検隊」(2007)、市街地の路上で沖縄をイメージする色彩カードを歩行者や観光客に選んでもらい、現在や未来へのメッセージを書いてもらう「ココロノイロ」(2006)、北谷町でこちらが準備したりボンをつけている人同士が声をかけ仲良くなるという作画的コミュニケーションを試みた「りぼんプロジェクト」(2005)、学生と通行する不特定の人々によって路上にダンボールで居住空間を作っていく「ゼロ・プロジェクト」(2005)、沖縄の商業エリアである北谷町美浜の店舗に交渉をし、地域通貨をゲーム化した「ヒトノカタチ」(2004)、そして那覇市の農産物市場で市場巡りのイベントとして実践した「農連モノレール」(2003)等が挙げられる。なんと、これらがネーミングから内容、場所まで、すべて学生主導で進めたプロジェクトであったというのは、今更ながら驚きである。

2 オルタナティブな実践と地域振興

筆者自身はこの学生企画のプロジェクトの経験を経て、オルタナティブの一つの形として「テント型スペース」の企画にたどり着き、それを一つの実験的スペースやマイノリティのコミュニティとするプロジェクト⁽²⁾を企画した(2011年2月)。当時、weblog「島ナイチャーはゴーギャンの夢をみるか」⁽³⁾(2009-2015年連載)にも書いたことと一部、重複するが、筆者はこう考えていた。

近年、オルタナティブという言葉に冠したスペースをよく目にするようになった。しかし、いつも疑問に思うのは、「何に対するオルタナティブなのか」という事だ。これは本質的な事だろう。語意的には Alternative とは代替案を意味するが、全国のそういった店舗やギャラリーを調べると、場所がマイナーなだけで本当に今の社会や文化、美術に対しての代案となっているかは疑問を持つ事もままあったりする。単なるリノベーションだったり、時にはセレクトショップの様相だったり。それでいいのだろうかと思っていた。例えば、どのような廃ビルでもシャッター街商店でも、そこには私有地を前提とした建築物という不動産がある。かのマルクスではないが、この土地の個人私有という地点から既に持つものと持たざるものという区分、格差があり、そこをクリアしない限り代案とは言えないと思ったのだ。仮に



Art Space Zelt

Alternative Space Project
and "Zelt" (Zelt)

Zeltsack (ツェルトザック) Project テント形式スペースおよび広報媒体(吉村壮明発注およびデザイン), 2011

好意によって低賃金や無賃で提供してくれたとしても、それは誰しも可能な代案ではない。なぜなら企画説明の段階で数々の選別があるのだ。このあたりで、物件を決めては葛藤するという泥沼に入り込み、企画から4年以上もかかってしまったのだ。無論、助成金を申請して、運営していけば良いという考え方もあろう。月々の僅かな廃ビルやシャッター街商店の賃貸があろうと、それでまかなっていけばいいのだ。

だが、ここでも立ち止まった。そもそも助成金は確実な投資として、すなわちあるプロジェクトに対しての助成は投資に足る企画やスタッフに行われる。これが例えば未だ社会的評価の定まらない学生や家庭に入っている主婦・主夫の企画であれば、いやプレカリアートであればどうだろう。100歩譲ってその助成情報に到達出来たとしても、パスする事はかなり困難だろう。なぜなら、そこには「文化資本」(ブルデュー)の差異と強度が立ちだかっているからである。そういった事を考えると、私のこのプロジェクトの目的は自ずとはっきりしてくる。誰でも最小限の資本で立ち上げる事ができ、それが自立への端緒となる Space (場や空間)の構築である。そう考えれば、土地や空間の私有の批判、見えない文化資本を射程にそれを討つというアプローチになってくるようにも思う。結果、具体的に導きだされたのはテント形式による移動ギャラリーである。おまけに足に車輪をつければ、なんと車両にもなる。要は東南アジアの屋台のような社会的な隙間を狙うわけだ。段ボールハウスやグラフィティの切実な仮設性と速度感もイメージできるし、場所に寄生していくというところから、川俣正氏の廃材によるアプローチとも近接性を持つようにも思う。このプロジェクトは表現と教育、文化、生活に関するオルタナティブとは何かという問いの実践になるのだろうが、2400mm×3600mmの空間で何が出来るだろう。2006年末に考え始めて、2011年3月スタート。実に長かったが、この試行錯誤は無駄ではないのだ、と。

具体的には宜野湾市の飲食店や県営住宅の駐車場で「自由ラジオ」をメインとしたが、このテント形式の移動スペースのテンポラリーな特性

は、地域振興を考えるにあたって、再度、考えてみる余地があるように思われる。電子網とSNSが覆い尽くした世界にあっても、人は衣食住を伴う現実空間で生きていくという点において。

その後、私自身は2012年、2014年に派遣していただいた九州大学大学院研修員(前勤務大学サバティカル)の折には、その問題意識から既存の制度を前提にしないオルタナティブスペース⁽⁴⁾の調査を行った。その枠組みで韓国大邱市の慶北大学校山格洞キャンパスに足を運び、ビジター用のゲストハウスで起居し、広大な敷地の中を自由に視察し、展覧会や講演に招聘いただいたが、あの当時の元九州造形短期大学(現九州産業大学造形短期大学部)の黒岩恭介学長や前田信明特任教授とのダントー研究会は、今となっては実に貴重な時間だったのだと実感する。これらの調査が必ずしも成功したとは言えないが、この数々の実践や経験が現在の別府大学における「地域社会フィールドワーク演習」という科目に繋がっているのは紛れもない事実である。

③ 本学「地域社会フィールドワーク演習」の目的

ここまで2003年にスタートした地域社会に関する筆者の実践を振り返ってみたのだが、本学での「地域社会フィールドワーク演習」では、別府・大分近隣自治体での地域振興を目的としている。概要としては、超高齢化と少子化に加え、地方においては、かつての中心街のシャッター街化、郊外のモール化(地方の生活空間の均質化)が急激に進行している事を前提とし、その状況に対する地域振興への方途として、授業ではアートプロジェクトやオルタナティブな活動(資本主義や市場原理に則らない「代案」としての実践)を参照しつつ、グループワークやフィールドワークを通して、学生達が主体的に「地域」の「振興」に対して寄与する協働的かつ独創的なアプローチを模索する事が目的である。この別府という土地で学生と企画を検討し、「昭和地獄観察隊」というプロジェクトを形にしたのが2018年であり、今年度が二回目となる。

別府大学
教養科目「地域社会フィールドワーク演習」

昭和地獄観察隊 コンセプト

別府を散策してみると、そこに、いまだ「昭和」が残存していることに驚かされる。それは別府湾を抱くような扇状地で、世界有数の温泉郷という地の恵みに依拠した観光産業が連続と息づいている証左であり、近年の別府への韓国や中国などの東アジア、東南アジアの人材流入とも相まって、この地方都市は、この人口の規模でありながら、キッチンで混地とした、ある種、アジア化のグローバルズムを受け入れつつも、それでも別府は「別府である」というスタンスを崩すことはない。地の利というもの、すなわち「温泉」がこの土地の文化を覆い尽くしているのだから。和辻哲郎であれば、それを「風土」による文化決定と言うだろう。無論、その背景には温泉のある飲食地として熱海や草津などと同様、別府が昭和の一大観光産業地として栄えた歴史がある。多くの国内の観光地は平成的洗練化ともいえるべき、スーパーフラットでモータリゼーションされた洗練化を行ってきた。それは商店街から百貨店、そして郊外型モール化への移行の軌跡とリンクしているが、未だ別府はガード下の商店街や非グローバルチェーンによる多くの飲食店が並び、実にしぶとく息づいている。その基盤にあるのは、大資本の投入の是非以前に、人々の「昭和」という厚みある記憶に他ならないのではないだろうか。昨今のどこにいても同じ光景の地方都市の景観とは異なり、温けむりの旅情という昭和的イメージの向こうに垣間見える、アジア的混地やプリコラージュ的な小さな飲食店、昭和的建築物・住宅地には、また違った可笑しみの魅力がある。そもそも「地獄」というネガティブな言葉がこれほど肯定的かつ日常的な言葉として語られる場所は、別府しかない。あの「地獄に行ってきました」という定番のTシャツなど、実に面白いではないか。

奇しくも元号が「平成」から「令和」に変わった今、「昭和」的というのは、こういうものだったのだなと通りを歩いてみて思う。むしろ昭和の残存しているこの別府という街並み自体を、地方の荒廃と捉えず、ある種の自虐でもなく、かの赤瀬川原平が「トマン」を定養づけた路上や建築物のように、逆説的にそれ自体を面白がりながら、歩いてみるのもいいのではないだろうか。そう。作られた観光（ツーリズム）ではなく、我々は、かの路上観察会のように「昭和地獄」としての別府を再発見するフィールドワークを学生と共に提案したいと思っている。すなわち、既視的な「別府の昭和感」と「アジア的振舞感」が我々の地域振興の視点にほかならない。

文：吉村壮明

「地域社会フィールドワーク演習」(学際科目群・教養科目)
超高齢化と少子化に加え、地方においては、かつての中心街のシャッター街化、郊外のモール化(地方の生活空間の増質)が急激に進行しており、その状況に対する地域振興への方策が求められています。授業では、非営利・NPOや自治体を中心に地方で取り組まれている表層によるアートプロジェクトやオルタナティブな活動(資本主義や市場原理に頼らない「在地」としての活動)を参照しつつ、フィールドワークを通して、学生が主体的に「在地」の「振興」に対して寄与する協働的かつ社会的なアプローチを模索することを目的としています。

企画：別府大学「地域社会フィールドワーク演習」プロジェクト2019
吉村壮明+文学部・食物栄養科学部・国際経営学部・短期大学部 学生
E-Mail: yoshi@nmbeppu-u.ac.jp (吉村壮明研究室)

地域社会フィールドワーク演習「昭和地獄観察隊」プロジェクト広報媒体、吉村壮明+文学部・食物栄養科学部・国際経営学部・短期大学部学生83名参加、2019

教養科目「地域社会フィールドワーク演習」では、最初の授業で地域振興に関する先進事例(グローバル化の状況やアウトノミア運動、全国各地の地域振興プロジェクト)やプロジェクトの発想方法(ブレヒトの「異化作用」やクリストのアプローチ等)を紹介し、学生主体で何が出来るかを検討してもらった。学部学科を横断するグループ分けを行い、そこで人間関係を構築しつつ、7/19(金)4、5コマ、7/20(土)1、2コマ、7/20(土)3、4コマにフィールドワークを実施し、場所は(1)大学通りエリア(別府大学-別府大学駅)、(2)大学学食、(3)香りの森博物館・中庭、(4)鉄輪温泉・いでゆ坂エリアが対象となった。前年の2018年は熱中症警報が出ている状況で、健康状態に配慮し二回の実施延期を余儀なくされたが、その事も念頭に置きつつ、2019年のフィールドワーク当日の準備物は、撮影用携帯(スマホ)、ネームストラップ(活動前にグループリーダーに配布)、日傘、雨具、歩きやすい靴、水(熱中症予防)、ペン、メモ。活動内容は、各グループのテーマに沿ったフィールド

ワークによる撮影で、ドキュメント形式にする為にグループ活動自体も撮影することに留意してもらっている。

前後したが、活動目的として、「大学を軸

として地域の新たな視点を発見することを目的とする。そのため、自分達の活動を含めて、地域の振興や活性化につながるフィールドワークとその活動の撮影を行う。なお、グループで動画や画像を撮影するが、編集で3-10分のドキュメンタリー(グループに配布したGoogle PlayやiTunesによってダウンロードした動画編集アプリ活用)にするため、素材としての動画はトータルで40-60分ぐらい必要となる(次回に編集作業をして提出)⁽⁵⁾というソーシャルメディア活用が今までのプロジェクトと大きく違う点だろう。



地域社会フィールドワーク演習「昭和地獄観察隊」プロジェクト撮影・編集のため、グループに配布した動画編集アプリケーションダウンロードのためのGoogle PlayやiTunesプリペイドカード(2019,7)。



地域社会フィールドワーク演習「昭和地獄観察隊」プロジェクトの雨天時フィールドワーク撮影画像(2019,7)。

ただ、昨今の地域振興プロジェクトで難しいのは、教育的観点からも、一億総ジャーナリスト的状况からも、諸刃の剣のようなSNSの扱いである。このあたりは開放型SNS以降の感覚を持つ学生のメディアリテラシーと直結しているが、それ故、過去のプロジェクトではありえなかった留意点がどうしても膨大なものとなったのは改めて驚かざるをえない。デイヴィッド・ライアンの言う「自他のモニタリング」のリスク回避が特に「教

育」という範疇には求められているのだろう。今日出現しつつある「監視文化」(culture of surveillance)⁽⁶⁾は、ジョージ・オーウェルが小説『1984年』(1949年刊行)で描いた「監視社会」の世界とは全く異質かつ空前のものであり、ソーシャルメディアを通じた「見られたい欲望」がコンテンツ作成の



地域社会フィールドワーク演習「昭和地獄観察隊」プロジェクト撮影・編集のための配布ストラップおよび猛暑のフィールドワーク画像(2018, 7)。

ツールとしても、活動情報アップのプラットフォームとしても、SNSが一般化した現在、我々の地域の「振興」の前に累々と横たわっているのである。それにしても、このような配慮事項はかつての地域社会プロジェクトでは考えなかったことだ。例えば、今回の配布資料「昭和地獄観察隊プロジェクトの実施にあたって」における7. 留意点(1)フィールドワーク活動では、①映像撮影担当が中心に撮影するが、その他2名ぐらいが活動自体の状況も撮影すること。②もしお店などの商業施設を扱う場合、いきなり撮影するのではなく、ストラップを見せて、必ずグループリーダーが「別府大学の学生です。現在、地域振興の活動をしているのですが、動画撮影や取材をしていいでしょうか」と許可を得ること。店舗名などは他のメンバーがメモしておくこと。③他のお客さんや通行者、車に配慮すること(SNSアップ予定のため、勝手に撮影しない)。④路上通行の場合、通行状況で問題のある言動をとらないこと(内輪受けや事故に注意)。⑤テーマに沿ってアプリで編集することを考え、映像データとして複数撮影すること。⑥地域や店舗を卑下したり、いわゆる「ディスる」ような感覚でフィールドワーク・撮影は決してしないこと(地域活性化が目的のため)。⑦活動開始と終了時には、必ず

リーダーさんが吉村まで、連絡すること(約3~4グループの同時進行活動で吉村が複数グループを行き来する為)。といった具合である。これでInstagramやYouTubeのアップに漕ぎ着けられる独自性や創造性に加え、ある種の道徳性を持っているのかどうかは、実に判断が分かれるところであるが、今後、SNSも活用していくことを前提に、コンテンツとしての映像化に関する具体的な報告は次回としたい。

4 地域振興を通じた「各自が主体となるプロジェクト」というアポリア

筆者にとって印象深いプロジェクトがある。それは、地域振興の取り組みに携わり始めて8年目の時期で、形にする上で恐ろしいほどにトラブルが頻発したプロジェクトだったからである。それはまさに「協働」や「協同」、あるいは「共同」と言い換えてもいいが、その実践の困難さであったと言える。

そもそも、こういった学生による自由なプロジェクトをやってみようと思いついたきっかけは、やはり、エーコの「開かれた作品」という概念を教育そのものに持ち込めばどうなるのかという発想からだったように思うが、その後、このプロジェクト型の活動はレッジョ・アプローチなどに代表されるような保育や教育にまで広がりを見せつつある。「受容者の積極的参加によって初めて作品(場)が成立する」という視点はかなり魅力的だ。それを、まさに社会や日常の営みにまで敷衍して解釈すれば、プロジェクト型の表現だけではなく、教育活動全般を再定義できる地平が開けはしないかと思ったのだ。かつて筆者も共同執筆した『セルフ・エデュケーション時代』(フィルムアート社, 2004)でも述べられている事だが、この活動では主体不在のあやうさ、受容者の浮上、場の形成の方法、コンテキストの重要性などが実感できる。こういった方向性のワークショップやイベントを「生成する作品としての教育」といえばいいのだろうか。

最初、「自由にやってよい」というと学生は喜

んでくれるが、しかし次第に全員の合意形成という点の難しさに直面する。思いつきでもよいが、その個人の企画を通すには他者とのぶつかり合いが生まれ、思考停止の時期を乗り越え、次第に現実性をおびて、社会的な折衝をクリアし数ヶ月をかけて企画、交渉、運営という、まさに「実践」を行っていくわけだ。

難しいのは教員も同じだ。「学生による自主企画で内容も自由なイベント」といえば楽なようだが、実はこちらがなるべくコメントやアドバイスをしないというのは予想外に難しい。目の前で討議されている内容に対し、経験によるスキルや情報によるアドバイスを行う事は簡単だ。しかし極力しない。なぜなら、発言すれば不本意ながらも私の方に意見が流れるのは予想で

きるからだ。簡単なのはこちらが企画を提示し、その意義を説き、賛同や共感を得て、各自の役割を担ってもらおうという通常のツリー状でステイックな方法だろう。だが、それは果たして共生や主体性、平等、自主性という観点から問題は無いのだろうか。さらに教師や学生という関係から派生する権力構造も払拭し難い。そういった問



ココノイロ・プロジェクトおよび
広報媒体、吉村壮明+総合教育研
究ゼミ学生、2010(沖縄印刷 Design
Styleデザイン)<https://dstyle.ti-da.net/e2985197.html>

題意識から、こういった「学生の自主企画によるイベント」に取り組んだのだと思う。イベントの場所は市場や路上、学校、駅など様々だ。当然ながら企画を成立させるには学生間との協調を学生自身がコントロールし、その場所をリサーチして商工会や公共機関、店舗などでの交渉を行わねばならない。さらには場所からコンセプトを練り直したり、現実的側面から場所を発想したりと、活動はなかなかスムーズにはいかない。そういえば、交渉の段階で頓挫してうまくいかなかったイベントもいくつかある。例えば那覇空港でのプロジェクトもそうだ。幾度となく空港管理会社との交渉を重ねたが、最終的に使用する風船やペットボトルから破裂音が生じる可能性という点でテロ警戒の問題が浮上し、変更を余儀なくされた。

筆者の関わった学生達はこれまで数々のプロジェクトを企画実践してきたわけだが、結果的にやり遂げた充実感はあったかもしれない。しかし折衝や交渉の経験は学生達にとって決して居心地のいい空間でも時間でもなかっただろう。だがそれでよいのではないだろうか。多分、自己や他者を育てあげるとはそういうものだからだ。価値観の異なる「他者」をどう受け入れるのか。頻発するトラブルや交渉をどうクリアするのか。対等な立場はありうるのか。やり遂げた「実感」とはなんなのか。予定調和ではない結末とはなにか。いや、月並みだが、そこに結論や答えなどはなく、この問いやプロセスそのものが意義だといえる活動。それがこの「学生自主企画プロジェクト」なのかもしれない。

5 おわりに

このプロジェクト立案に伴う「自己」と「他者」の葛藤は、教育プログラムとしての共同体を真摯に考えていくと、実に難問である。ただ、道筋はある。それは他者性や多様性を前提にしたコミュニティという意識の自覚だ。アマルティア・センは「アイデンティティに先行する理性」という考え方を述べている。かつての「血や土」(ダレ)という土着的郷土性への視点や「想像の共同体」(アンダーソン)、具体的に言えば、既に在る地

域や社会組織に所属・従属するのは、学生が受動的であれば、ある意味、楽な部分もあるだろう。ところが、実際、その場の多くは権力を保持したマジョリティの「価値観の同質性」を前提に構築されているのだ。この既存共同体への同化・強制プロセスが全体主義やナショナリズムの素地になっているわけだが、本来、人間とは多様であるはずだ。社会的にダイバーシティ化が進行している最中、まずもって重要なのは、異なる価値観や他者性を認める意識を個々が持つ事ではないのだろうか。自分が自分である実感（アイデンティティ化）は、学内外での様々な経験を通して形成されるものだが、地域社会プロジェクトに携わる学生の皆さんには、同時に他者を受容する気持ちを持ってもらいたいと願っている。その自他を眼差す「理性」的意識こそが他者性や多様性を含みこむ「新たな共同体」を作る根っこになるのだから。その意識が地域社会研究の実践の根幹であって欲しいと筆者は強く願ってやまない。

註および参考文献

- (1) Wanakioとは「okinawa (オキナワ) を並べ替えた造語で、地域に既にある素材を活かしつつ、その良さや特徴を内、外部の視点により見つめ直し、新しい価値を見だしていくという意味が込められている。展示会を作り上げる過程を重視し、アーティストが地域を訪れ、その地域の歴史や成り立ち、人々とのコミュニケーションを通じて、発見、感動をみつける。また、現地で作品化していくことでアーティストのみならず、地域の人々にも新しい発見や、戸惑い、想像する力が生まれることになる。Wanakioは世代やジャンルを越え、全ての人に開かれたARTを通しての出来事、或は事件」と秀逸な文章でその意義が述べられている。<http://www.wanakio.com>もしくはhttp://uchimax.com/work_2001ikou/work2005_4.htmlを参照。
- (2) このテント形式のスペースは、簡単な構造だが、アート作品の発表や実験映像の上映、自由ラジオによるコミュニティ構築、文化装置としてのカフェなど、ニュートラルでテンポラリーな場となる。必要なのはスポットライトやチェア、テーブル。それに電源としての小型発電機である。筆者は当時、日本で最も草分けであった粉川哲夫氏の「自由ラジオ」に関心を持ち、東京経済大学でメディアアートを研究されている大塚淳氏から「自由ラジオ」の必要な道具の詳細をお聞きし、このテント式スペースで実践をした。
- (3) 2009年から2015年まで連載していた吉村壮明のweblog「島ナイチャーはゴーギャンの夢を見るか」(2011.3.18)の記事を参照。<https://shibasoul2.hatenadiary.org/entry/20110318/1300405244>
- (4) 例えば、筆者が訪問したオルタナティブスペースとして、art space tetraがある。「アートスペース・テトラ」は、福岡市の中心部でありながら枯れた情緒を残す博

多区須崎町に2004年4月、オープンいたしました。企画者や美術家、音楽家、デザイナー等による共同経営という形で運営され、利用者、来場者の方々との交流の中で、常に何かを発見できる場所として変化を続けています。そして、福岡だけにとどまらず、世界中へとネットワークを広げ、表現と交流の場を押し拡げていきたいと考えています」とホームページでは設立の意義が述べられている。<http://www.as-tetra.info/archives/2004/040101100000.html>

- (5) 別府大学全学部教養科目「地域社会フィールドワーク演習」(担当：吉村壮明)の配布物「昭和地獄観察隊プロジェクトの実施にあたって」より抜粋。
- (6) デイヴィッド・ライアン／田畑暁生訳『監視文化の誕生』青土社, 2019